

## 人類の進化と変遷・その寄る辺なき旅を凝縮した演劇叙事詩

文：尾上そら

闇。  
劇場には不可欠のものだが、この日のKAAT神奈川芸術劇場（ホール）は、その幕開きに生き物の如き深く濃い夜の闇を宿していた。やがて上空に灯る微かな光。静寂に種々の鳴き声、生き物の気配がにじむ。それらに誘われるように現れたのは、手足をともに地につけて駆ける類人猿だ。老若雌雄の同族が続き、舞台上に小さな群れができる。およそ200万年前、それが壮大な時間旅行の始まりだった。

『人類史』はタイトルが示す通り、一介の動物に過ぎなかったヒトが“ホモ・サピエンス＝賢きヒト”となり、この地球で他の生き物を圧する存在になっていく変遷を編んだ演劇叙事詩だ。世界的ベストセラーである歴史学者ユヴァル・ノア・ハラリの『サピエンス全史』に想を得た作・演出の谷賢一は、第一幕では類人猿が言葉やコミュニケーションを獲得したことで集団を形成し、それが人間の社会となって宗教や権力が生まれる過程を、第二幕は17世紀初頭のヴェネツィアの居酒屋を舞台に、科学や経済の発展が人間と世の中の仕組みを変えていく様を立ち上げていく。

第一幕で類人猿から人間へと進化していく様子を、美しく鮮烈な身体詩として舞台に描くエラ・ホチルドの振付が素晴らしい。動物的な動きから直立二足歩行となり、声や発語を獲得した人間は自然に美を見出し、芸術を生み、死者を悼み神を祀るようになる。歓喜や悲哀、畏敬の感情が動きとリンクし、志磨遼平の音楽を得てうねり進む光景は、人間の身体が本来持っていた原初的な美を思い出させてくれる。

だが人間はそんな純粋さをすぐに捨て、自身と他者の間に境界を引く社会を形成し、宗教というツールを用い、力を持つ者と持たざる者を隔て始める。一幕終わりから二幕で描かれるのは、そんな権力者による搾取と教化、弾圧が人間の精神と社会をいかに歪めるかを透かすドラマだ。

疫病の流行に神の怒りを重ね、善意に見せかけた排他で真実が曲げられる様子を出させる台詞の数々は劇作家・谷の真骨頂。自らの不安を、弱者を排斥することでごまかそうとする人間の残酷性は、17世紀も現在も変わりがないと突きつけられた。

続く科学の発展とその加速が救いとなるのも一時的なこと。宇宙にまでテリトリーを広げたものの、人間の目に映るのは類人猿が見上げた果てない夜空と同様の、茫漠とした光景なのではないか。18世紀以降まだ見ぬ未来までを映像と音と言葉で綴る5分ほどの最終景と、その後、不意に闇に閉ざされた舞台に目を凝らしつつそんなことを考えた。

### KAAT神奈川芸術劇場プロデュース

#### 『人類史』

2020年10月23日(金)～11月3日(火・祝) | ホール |

作・演出：谷賢一  
音楽：志磨遼平(ドレスコース)  
振付：エラ・ホチルド  
出演：東出昌大 昆夏美 / 山路和弘  
秋葉陽司 浅沼圭 生島翔 植田崇幸  
大久保真希 奥村佳恵 小山萌子  
谷本充弘 内藤治水 中林舞 名取耶ゆり  
奈良坂潤紀 仁田晶凱 福原冠 村岡哲至



Photo by 宮川舞子



Photo by 細野晋司

## 荒漠とした旅を照らす、一筋の光

文：凜

開演の合図と共に静まり返る劇場。そこへ、ザックザックという足音と、静かな衣擦れの音が近付いてくる。一行は、客席後方から真っ直ぐ、何も無い舞台上へ。すると時代は、現代から古代ギリシャへと一変した。

『オ레스テスとピュラデス』は、杉原邦生がKAATとのコラボレーションで立ち上げる、3本目のギリシャ悲劇だ。2018年に「オイディプス王」をベースにした「オイディプスREXXX」、2019年にギリシャ悲劇10本を1本にまとめた「ギリクス」に挑んだ杉原は、今回、「ギリクス」に登場する2人の青年、オレステスとピュラデスの“描かれていない物語”に注目。“復讐の女神たち”からのがれるため、アポロンの神託に従ってアテナイからタウリケへ向かうことになった2人の、知られざる旅を描き出した。台本を手がけたのは、歴史や物語に埋もれた人々の思いを細やかに描き出す、ミナモザの瀬戸山美咲。杉原と瀬戸山のタッグは初となるが、今年1月からほぼ丸1年、2人は台本作りに取り組んできた。10稿以上に及ぶ推敲が重ねられて出来上がった台本は、オレステスとピュラデスはもちろん、戦争の勝者と敗者、それぞれの苦悩が刻み込まれた、熱く生々しいものとなった。

母親殺しの罪悪感に取り憑かれ、狂気と正気の間で苦悩するオレステスを演じたのは、初舞台の鈴木仁。端正な外見からは想像できないほどのエネルギーと、繊細さと凶暴性を併せ持つ若きオレステス像を立ち上げた。一方、親友オレステスのために周囲を振り切り、盲目的にタウリケを目指すピュラデスは、自身の中に渦巻く感情の正体を自覚し、悶絶し始める。今回が2回目の舞台出演となる濱田龍臣は、そんな彼の複雑な内面を細やかに表現。ラストではピュラデスの精神的な成長を感じさせた。

セリフの上ではストレートに言葉をぶつけ合う彼らだが、飲み込んだ本音は、Taichi Kanekoの音楽&板橋駿谷のリリックにより、コロスが歌うラップとして届けられる。さらに箱馬や脚立など、もともと劇場にあるものだけを使った松井るみの舞台美術は、剥き出しになったホールの空間をさらに広く感じさせた。荒漠とした道のりを、再び手を取り歩き出した、オレステスとピュラデス。彼らの肩に当たる光が柔らかかったことに、微かな希望を感じた。



### KAAT神奈川芸術劇場プロデュース

#### 『オレステスとピュラデス』

2020年11月28日(土)～12月13日(日) | ホール |

作：瀬戸山美咲  
演出：杉原邦生  
出演：鈴木仁 濱田龍臣  
趣里 大鶴義丹  
内田淳子 高山のえみ 中上サツキ 前原麻希 川飛舞花  
大久保祥太郎 武居卓 猪俣三四郎 天宮良 外山誠二